変わる日本の「暮らし」と「まち」 25

ベルトコンベヤーで迅速な復興を

宮城・東松島市復興支援事業・野蒜北部丘陵地区

（2012年◆平成24年から実施中）

新田匡央
にった・まさお
illustration：Shigeyuki Sakata

白いスモークで空に航跡を描きながら、アクロバット飛行を行うブルーインパルス。東京五輪の開会式で、国立競技場の上空に5色の輪を描いたのも彼らだ。東松島市の航空自衛隊松島基地を本拠とするブルーインパルスは、基地が東日本大震災による津波に被災するなか、幸運にも九州に展開していて難を逃れた。

基地の滑走路のほど近くにある陸前小野駅前には、小野駅前応急仮設住宅がある。入居者が手縫いで作る「おのくん」というぬいぐるみが人気だ。ネット販売では半年待たないと手に入らない。

「復興のために作り始めたんですが、多くの人が買ってくださるので、忙しくて仮設暮らしの辛さを考えている暇がありません」

この女性は、小野の隣町にある野蒜地区から避難していた。

◆生活再建はスピードが命

野蒜は海岸線から内陸へ1キロ程度まで平地が広がり、その先に小高い丘陵地がある。津波は海岸から500メートル以上離れた仙石線の線路を破壊し、丘陵地の手前の野蒜小学校まで到達した。濁流は体育館に避難した住民を飲み込み、多くの命が奪われた。平地にあった住宅も、壊滅状態と言っていいほどの被害を受けた。

住民は、今でも仮設住宅で不自由な暮らしを強いられている。東松島市長の阿部秀保氏は、一刻も早く市民に生活を再建してもらおうと復興のスピードを重視する。

「生活再建は、まずは住宅再建から。住宅再建は時間との勝負になります。被災者のために、一日も早く住宅を建てる場所を提供しなければなりません」

東松島市は、津波の被害が甚大だった市街地を移転促進地域に指定し、内陸の安全な場所に7つの住宅地の新設を決めた。野蒜地区も丘陵地を切り拓いて約92ヘクタールの敷地を確保し、住宅278区画と災害公営住宅170戸を用意する。被災した仙石線、学校など公共施設もすべて高台に移転する計画だ。そのマネジメントを任されたのがURだった。

「URさんにお願いしたのは、阪神・淡路大震災、新潟県中越沖地震などの実績からです。許可をいただく前に、URさんにお任せしようと議会に諮りました」

阿部市長はそう語る。2012年3月、東松島市とURは「復興事業推進」の協力協定を締結。URは野蒜地区と、東矢本地区の二ヵ所の開発を担うことになった。

市は開発地区を全面買収し、工事が迅速に進められるよう環境を整えた。URは、CM方式と呼ばれる契約の手法によって期間短縮を図る。通常のように設計、測量、施工の業者が別だと、そこに調整などが生じ、時間がかかってしまう。CM方式を採用すれば市は住民と国への対応に専念し、URはマネジメントに専念し、施工業者は工事に専念できる。得意分野に特化すれば事業の迅速化を図れるという考えだ。

ベルトコンベヤーで運ばれる土砂を50tダンプが素早く運ぶ。

◆コンベヤーが工期を大幅に短縮

松島は日本三景の一つだ。その一角にある「奥松島」と呼ばれる東松島の造成にあたっては、景観に配慮しなければならない。造成地と海の間に既存の緑地を残すよう設計し、麓から見ると造成地が隠れるよう配慮した。

これを実現するには、住宅地や公共施設が建設される造成地を緑地より低くする必要がある。仙石線の移設・復旧などの計画も併せて考えると、搬出する土砂は膨大な量になると予測された。そのうちの4割は造成地内の盛土に使用できるが、残りの6割は麓の保管場所まで搬出しなければならない。東松島市復興都市計画課長の小林典明氏はこう強調する。

「野蒜では、いかに早く土を搬出するかが最大のポイントです。解決策として提案されたのが、ベルトコンベヤーだったのです」

コンベヤーによる1日の搬出量は10トンダンプ1650台分に相当する。しかし、これだけの数のダンプを集めるのは困難だ。現実的に集められる数では、優に3年以上かかる。しかも住民と観光客に粉塵や排気ガスを吸わせ、危険な目に遭わせることはできない。

URは、工事の迅速化にはコンベヤーしかないと構想していた。コンベヤーを使えば期間は1年3ヵ月で済む。騒音もほとんどない。同じ構想を持った施工業者がURに話を持ちかけ、市へ提案する。UR東松島復興支援事務所の清水良祐所長は当時をこう振り返る。

「一日でも早く造成するには、最短で造成できる設備を使うべきです。時間がかかる設備で迅速にやるのは不可能です」

市は提案を受け入れた。13年8月からコンベヤーの設置に着手、今年1月中旬から稼動し始めた。総延長距離1・2キロの終点には50トンダンプ15台が待ち構え、保管場所まで運搬する。野蒜地区の宅地の完成は28年度の予定だ。

野蒜地区には、県外から視察者が頻繁に訪れる。そのためのインフォメーションセンターが設置されていた。URは、視察者が必ず立ち寄るこの場所で、地元の名産品を販売することを市の商工観光課に提案した。地元の産業に活力を取り戻してもらいたいと考えたからだ。これが「東松島あんてなしょっぷまちんど」である。

まちんどには皇室献上の海苔をはじめ、地元の海産物や農産物が並ぶ。ブルーインパルスのグッズも置かれている。スタッフの太田将司さんはこう語る。

「買っていただいたお土産を誰かに渡すとき、東松島について話してもらいたいですね。地元の漁師も農家も、支援をいただいてからは誰かのためにつくるようになったといいます。恩返しが元気と活力の源になっているんですね」

URは、地元住民と産業の「復興」にも一役買っている。

街に、ルネッサンス
UR　UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社